

魔法の言葉 プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：高橋 知司 所属：植草学園大学 発達教育学部 記録日：30年 2月 11日
キーワード：個別指導、コミュニケーション、SNS、自信、興味・関心

【対象児の情報】

- 学年 小学5年生
- 障害名 注意欠陥多動性障害（AD／HD）
- 障害と困難の内容

＜事前の実態把握＞

- ・授業に必要な道具を忘れることが多く、授業参加が難しいことがある。
- ・みんなに合わせた行動をとったり、気持ちを言葉で伝えたりすることが苦手である。

＜実際に関わる経過の中で＞

- ・場面に合わない不適切な言動により、友人関係や信頼関係に課題がある。
- ・興味関心が長続きせず、集中力に課題がある。

【活動目的】

- 当初のねらい

＜事前の実態把握から＞

- ・学習に必要なものの自己管理をできるようにする。
- ・SNS上で得意なことをテーマに伝え合い、言語で表現できるようにする。

＜実際に関わる経過から＞

- ・自立心への芽生えにつなげる。
- ・通常級で認められる経験から、自信をつける。

- 実施期間 平成29年5月から平成30年1月
- 報告者 高橋知司
- 報告者と対象児の関係 ちば！教職たまごプロジェクトでの研修校

※「ちば！教職たまごプロジェクト」について

千葉県が、公立学校教員を志望する大学生・短期大学生・大学院生を対象とした実践・体験の機会を提供し、教職への理解を深めるとともに、教員としての資質・能力の向上につなげるため実施しているもの。

【活動内容と対象児の変化】

○対象児の事前の状況

- ・忘れ物はほぼないが、母に言われて用意をしている。
- ・自分が混乱する要因についても分かるようになり、クールダウンの必要性を理解している。
- ・絵・運動・ゲーム・数学などが、対象児の長けている分野であるが、対象児は自信がない。
- ・対象児の在籍する通常級には、通級児童が他にもいることや、自校通級という点もあり、周囲の理解は進んでいる。
- ・場面に合わない不適切な言動が目立つことが多い。

○活動の具体的な内容

今回の使用アプリ等



リマインダー



By Talk for School



Web プログラミングサイト
プログル



Microsoft
PowerPoint

授業に必要な道具を忘れることが多く、授業に参加できない

予定を通知する機能があり、持ち物の管理ができるように、
「リマインダー」を活用
主に個別支援の時間に入力、確認



自分の気持ちを表出できる友人がいない
自分の気持ちを表出する手段として、「By Talk for School」を活用

最初はクイズのやり取りからスタートして、返信する必然性を設定した
主に個別支援の時間にやりとり



対象児の得意なことを活かしたい、ICTが得意で、自分でもできる
得意を活かすツールとして、Web プログラミングサイト「プログル」、Microsoft PowerPoint を活用



○対象児童の事後の変化

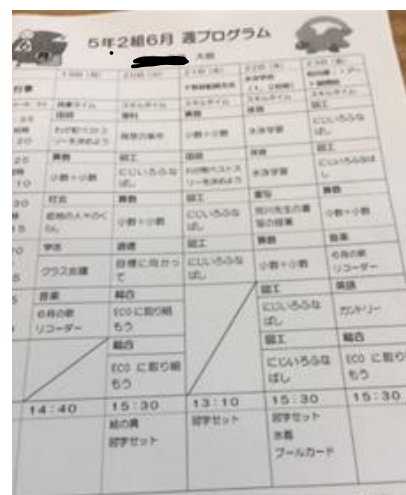
授業に必要な道具を忘れることが多く、授業に参加できない
 予定を通知する機能がある、「リマインダー」を活用



- ・通級の個別指導の時間に、リマインダーの使い方の説明をすると、自分から進んで入力を行っていた。
 - ・私物のiPhoneを持っていることもあり、入力はスムーズに、「フリック入力」または「ローマ字入力」ができていた。
- ①5月活用開始時は、運動会練習期間ということもあり、入力数は少なめだった。
 ②使っていくうちに、「こういう風に使ってみたい」と自ら希望し、今日の感想も入力した。
 ③リマインダーへの入力忘れもあったので、月曜日の個別指導の時間に1週間の予定を入力することにした。



- ・「By Talk for School」が未開通だったため、「リマインダー」をクラウドで共有し、急遽の連絡を送った。(左下図)



- ・指導場面でのリマインダーへの記入は積極的に行ったが、1ヶ月が経過した時点で、家庭でリマインダーをチェックするなど継続して活用することは難しかった。対象児に、リマインダーと週プログラム（担任が配布している次週の予定一覧表）のどちらを使うか尋ねたところ、使い慣れているとの理由で週プログラムを選択した。
- ・リマインダーへの記入など個別指導で大人と一緒にであればできることもあるが、家庭で自分で気付いて活用することや、それを継続することは対象児ひとりでは難しかった。継続した活用のためには、家庭で確認するまでを指導し、その良さを実感できるように支援する必要があると考えた。

自分の気持ちを出せる友人がいない

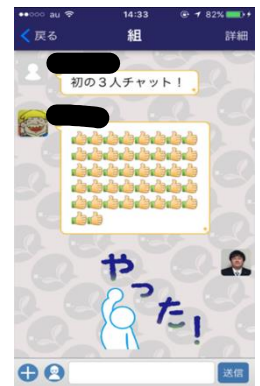
自分の気持ちを出せる手段として、「By Talk for School」を活用



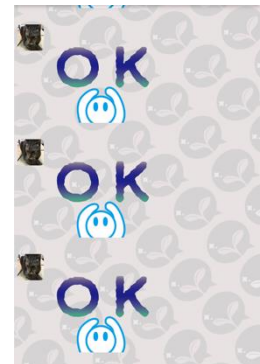
- ・ 研修校PCはセキュリティの問題で開始時期が遅れてしまったが、6月から報告者と対象児での利用開始。
- ・ 最初は使い方の説明をしていなかったため、返信はなかったが、使い方の説明・練習をしたので、右図のようなやりとりをすることができた。
- ・ 通級指導があった日の放課後は、返信が来るが多かったが、その他の日はチェックマークがついた。



- ・ 7月研修校PCでの「By Talk for School」が可能となり、通級担当との利用も可能となった。(右図)
- ・ 夏休み中の使用方法について、夏休み前に、「保護者へ夏休みの出来事等写真を撮ったりして、送ってください。」と、通常級担任・通級担当との面談で依頼してもらった。報告者からは、スタンプや動画、地域の花火大会について、送信をしたところ、チェックマークがついた。返信はないものの、報告者のメッセージは確実に読んでいるようであった。



- ・ 9月には、感情を出せる手段として、スタンプを連打した。数種類のスタンプを使用した。強いタッチで連打をした。



- ・ 夏休み期間になぜ返信をしなかったのか尋ねたところ、「私物のiPhoneがあるから面倒」と答えた。保護者に承諾を取り、私物のiPhoneにBy Talk for Schoolをダウンロードしようと試みたが、対象児が「(容量が)重くなるから嫌だ」と言ったので、対象児の気持ちを尊重した。

- ・ 11月には、好きなテーマ(一筆書きクイズ)に対して、文字での返信や、「さすが!」といった報告者をほめる場面が見受けられた。



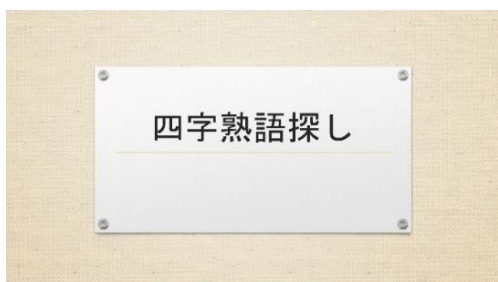
- ・ 報告者から送信をしても、返信がこないことが多かったが、対象児と『つながる』ことを大切に、定期的を送信した。

対象児の得意なことを活かしたい

得意を活かすツールとして、Web プログラミングサイト「プログル」、Microsoft PowerPoint を活用



- ・対象児と会話をしていく中で、「Scratch (プログラミング)」を家庭でも行っていることを知った。得意なことを活かそうと、取り入れようとしたところ、研修校PCのセキュリティにより「Scratch」を行うことはできなかったが、代替として、Webプログラミングサイト「プログル」が使用することができたため、使用することにした。
- ・プログルはステージごとのプログラミングの難易度があり、対象児は自ら進んで問題を解いていた。自由にプログラミングできるステージでは試行錯誤しながら取り組む様子が見受けられた。
- ・プログラミングへの興味が低下してきたため、対象児の好きな漢字を使ったクイズを行うことにした。内容は、格子状の中に当てはまっている漢字の列から四字熟語を探すクイズゲームである。最初は見本として、報告者が、2問作成をした。クイズに出す四字熟語を、対象児が選び、それを基に、報告者が入力したり、当てはめる形式にしたりして一緒に作成した。
- ・「ここに入れてほしい」と提案したり、「この四字熟語なんとなく好き」といった感想を伝えたりした。



- ・通常級でのプレゼンを意図していたが、カリキュラム上12月～1月の実施が困難であった。最終目標として、作成したクイズを通常級でプレゼンすることを目指し、練習を兼ねて通級の先生に向けてプレゼンを行った。



- ・自分からアプリを立ち上げた。
- ・通級の先生の反応に対して、笑顔でほめながら、画面を進めた。

○報告者の気づき

～自分の気持ちを伝えられるようになった～

当初は友人ができず、思いを話せる人が少なかった。

- ・大学生である報告者と週1回15分の個別指導や通常級での細かい関わりを大切にすることで、ハグや甘えなどの表現ができるようになった。
- ・大学生である報告者とSNS上のつながりを持ち続けることで、実際に会わなくても、場所や時間の制限なくつながることができた。
- ・単に出来事や、自分の好きなことを伝えるだけではなく、対象児がクイズを出し、報告者の解答にて、「ほめる」というやり取りもあった。日常生活では、他人を認める言動がみられない対象児にとって、大きな変化であると考えられる。

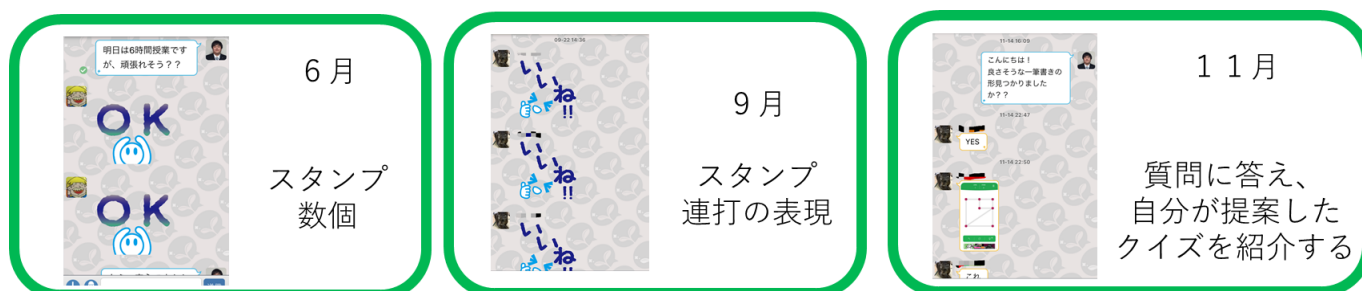
～得意なことについてプレゼンするための準備学習場面では、集中して取り組めた～

当初は、通常級で所属の気持ちを高めるために設定したが、カリキュラム上困難であったため、通級指導教室の先生に協力を依頼して、プレゼンをした。

- ・自分から提案してきた「四字熟語探し」や「漢字クイズ」は得意なテーマであり、それを通常級で伝える設定により、学習への意欲が高まったと考えられる。

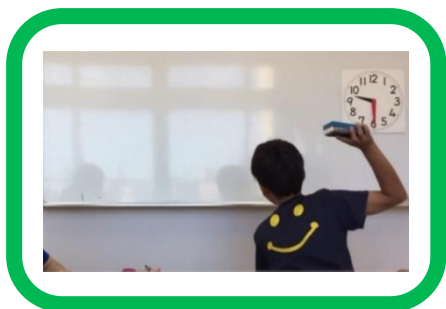
○エビデンス

～報告者との関わりの変化～



- ・6月はスタンプを利用した返信が多く見受けられ、9月には一回の返信にスタンプ連打をしての表現が多く見受けられた。これは、通級・通常級での様子や投薬での安定と比例している。
- ・11月には、比較的落ち着いてきたため、報告者が質問したことに、短文での返信や、スクリーンショットの画像を添付するなど、やりとりに変化が見受けられた。
- ・報告者との関わりでは、「単なる質問から、やりとりを楽しみ、自分から提案し、報告者を褒める」と質的な変化がみられた。
- ・個別指導での場面でも変化がみられた。実際に会えなくても、SNSで繋がっていたため、通常級担任には見せない甘え（「一緒に帰ろう」と言ったり、スキンシップを求めたりする）を表現した。また、「友だちといると楽しいんだよね」など言語で気持ちを表現することも増えた。

～集中の変化～



← 7月の個別の様子



→ 12月の個別の様子

- ・ 7月は、対象児の興味のあることに迫れず、個別の時間では集中の継続が難しい場面が見受けられた。しかし、12月には興味のあること、得意なことを活かすことができたため、自ら積極的に活動しようとする場面を多く見受けられた。
- ・ 7月と12月の個別指導場面各30分間を録画したVTRを分析した。対象児が集中して自ら学習に取り組むことができた時間について、行動指標としての観点（表1）に基づき、30分間における（+）（-）の行動時間の変容を分析し、7月（表2）12月（表3）に示した。

表1 行動指標としての観点

○ = (+) の行動	・ 進んで活動	・ 活動に取り組む	・ 報告者の指示に応じる	等
● = (-) の行動	・ 否定的な言動	・ 報告者の指示に応じない	・ スタンプ連打	等

表2 7月の個別指導における実態

分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
+	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○					○				○						○	○		
-							●		●						●	●	●	●		●	●	●		●	●	●	●			●	●

表3 12月の個別指導における実態

分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
+	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○				○			○	○	○	○	○	○						○			
-											●	●	●		●	●							●	●	●	●			●	●	●

- ・ 表2と表3を比べると、前半の集中の持続が表3の方が長い。また、後半の集中の持続も顕著である。このことから、得意な課題の導入の効果が示されたと考えられる。

○今後の課題

- ・ 中学進学を見据え、持ち物の自己管理の必要性を意識した上で、習慣化できるようにしたい。対象児、保護者、通級担当と再確認をし、自分持ちのiPhoneで管理できるようにしたい。
- ・ 通級で自分の得意を活かしてプレゼンできる機会が大変有効であったことから、引き続き興味関心に応じた題材を取り上げ、ICTを活用した支援の継続が望ましい。